

Kielから帰りの汽車で同じコンパートメントの入達から「ああお前が、あの急いでレベつた……」という様な調子で、恥かしいというよりもかくゆかいで結構色々なことを話して仲良くなりました。私は学会の間はY.H.を予約してもらいそこに泊りました。院生で参加した人も数人来ていて講演する人もいて、そんな時は専門が違うのに互いに聞きに行ったりして、終わると拍手をして私の肩をポンとたたいてくれたり、後で「どうだった」と聞くと色々なことを教えてくれました。特にアメリカ人は英語の事について親切に話してくれました。講演をしない人は唯聞くだけでなくその分野の専門家に会い研究方法を話したり、化石の写真を持参して種の同定を教えてもらう人も居ました。この様な学会の利用の仕方は学生にとって大変役立つ事だと思います。学会の参加費(50 D.M.)を節約する為には正式の参加者にならないで学会に出席した人も居ました。この学会での最大の収穫は何と云つてもNOMの存在を初めて知った事で、この様な素晴らしい会の今後の発展を祈っています。

学園だより

大阪市立大学 理学部 地学教室

池辺展生は和歌山県、率本地域の中新統熊野層群の浮遊性有孔虫化石を中心とした生層序学的研究を行なっている。主として*Lepidocyclina*と*Orbulina datum*の関係を明らかにすることが課題である。また、静岡、掛川地域及びその他各地域のNeogene に関しても共同で研究を進めており、新第三系の生層序と放射年代の総括をめざしている。

石井健一は古生代から中生代へかけての動物群の変遷を大テーマにして研究をすすめている。と

くに紡錘虫が古生代末にどのような原因で、どのように絶滅したのかに興味をもっている。

現在、具体的な研究手段として、上部ペルム系の紡錘虫化石だけでなく、その他の微化石も検討している。古生代末には紡錘虫の分布が局地的化してゆぐため、紡錘虫以外の化石(主として小型有孔虫)を用いて対比を行なうのが有効である。最終的には、テーマを中心に世界的視野に立って、紡錘虫の発生、消滅を明らかにしてゆきたい。

市川浩一郎は八尾船と共同で中・古生代の放射状化石の研究を行なっている。その他、中生代の二枚貝化石、とくにトリアス紀と白亜紀後期(和泉層群)からのものの記載を中心とした研究をおこなってきた。また、中生代Pteriomorphaの系統について基礎的研究をおこなった。

古谷正和は上部更新統一完新統の層序と花粉分析を手段とした植生変遷を明らかにするための研究をおこなっている。具体的には、大阪市、尼崎市、伊丹市地域の段丘層と平野部地下の地層を調査対象とし、ボーリング試料や段丘堆積層について花粉分析をおこなった。その結果、この地域では花粉化石による生層序学的研究がかなり有効なものであることが明らかになり、今後の見通しを得た。花粉分析に関しては、解析の目的と方法、堆積学的な面の考察、同定、処理過程における再現性と一般性という点について、花粉分析の方法論をより確かなものにする方向で検討されねばならないことを指摘した。現生の生物生態学の成果と比較してこれらを考察することが重要な課題である。

松岡教充はGDP 第11次研究航海(クダ8、10~8、25)で四国沖に出かけ、他に研究者とともに底質およびプランクトンの採集を行なった。今後、双鞭毛藻化石についての基礎的資料を得るため、プランクトンおよび底質群集間の組成の相違などを明らかにしたいと考えている。また前田

係夫とともに現生 *Quercus* 属花粉のSEMによる微細構造の検討を行なっている。今までに *Lepidobalanus* および *Cyclobalanopsis* では形態上の相違が明瞭であることがわかり、今後種レベルでの観察を行なう予定である。

八尾 昭 中・古生代の放射虫化石は、西南日本においてその多くが地角斜堆積層の中に見い出される。地角斜堆積層には一般的に化石が少なく、今までたよりにしていた石灰岩から産する化石は、その岩体の産状に問題が多いことから、あまりあてにしない方がよいということが明らかになってきた。そのため今まで見はなされていた放射虫化石なども地質学分野から注目された。むしろ、注目する必要が生じてきた。一方、大洋底堆積物中の微化石の研究はめざましく発達し、放射虫化石に関しても新生代だけでなく白亜紀のものに及んでいる。しかし大洋底には確かなジュラ紀以前の堆積物は発見されておらず、中生代（ないし古生代）の放射虫の系統を明らかにすることは今後の重要な研究課題となっている。以上を研究の背景として具体的には西南日本各地の本州地角斜、四万十地角斜堆積層中から放射虫化石（主として中生代のもの）を抽出し、重要と思われるグループ（中生代に特徴的で、白亜紀のものとの系統がつきそうなグループ）に関して集中的なとりくみをおこなう予定である。また、この研究過程で、あるいはその結果から、それらがより詳細なオーダーでの地質年代決定に有効なもの（つまり示準化石）としてこの位置を獲得するであろうという予測も立てている。

吉田史郎 は三浦半島の三浦層群において浮遊性有孔虫化石による生層序学的研究をおこなっている。すでに試料採集、処理は完了しており、現在検鏡の段階である。処理標本の概観から、三浦層

群上部において *Miocene-Pliocene boundary* に関する新しいデータが出そうである。

例会報告

大阪微化石研究会第7回例会

- (1) 1974年2月2日(上)
- (2) 京都大学
- (3) 28名
- (4) 1. 第9回国際第四紀研究連合会議 (INQUA) に参加して-----
池辺慶生 (大阪市大)
2. D.S.D.P Leg 3/ の成果----
小泉 格 (大阪大)
3. “コノドント” について-----
野上裕生 (京都大)
4. 機関紙 “NOM” の発刊について---

大阪微化石研究会第8回例会

- (1) 1974年4月6日(上)
- (2) 千里センタービル
- (3) 16名
- (4) 1. 掛川層群の浮遊性有孔虫について----
西村 昭 (京都大)
2. 奈良市付近の地獄谷累層について----
松岡敦充 (大阪市大)
3. 古生代デボン紀福地累層の古生物について-----
大野照文 (京都大)
4. 機関紙 “NOM” 第1号の発刊-----
小泉 格 (大阪大)

大阪微化石研究会第9回例会

- (1) 1974年6月8日(上)
- (2) 大阪市立自然史博物館
- (3) 19名